

幼児期の遊びにおける「学び」の研究 —探索・探究活動を通して獲得する「興味・関心」「目的意識」に着目して—

阪上 節子
SAKAUE Setsuko

要 旨

本研究は、3～5歳児クラスの保育実践として取り組んだ探索活動や探究的な活動の事例を通して、その中で見られる幼児期の「学び」とはどういったものなのか、探索・探究活動の過程を経て獲得していく学びと、その育ちの視点から論考した。その結果として、①探索活動も探究的な活動も、その過程において幼児なりの問題解決の過程が含まれていること。②探索活動から探究的な活動への目的意識を持った育ちの道すじがあること。③探索・探究的な活動における子どもの関係性・協同性の育ちも捉えて学びを整理する必要があること。子どもの「興味・関心」「目的意識」に着目した結果、見えてきたものも追記の必要があることが明らかになった。

キーワード：「学び」、概念的・認知的葛藤、探索的・探究的活動、目的意識・認知的興味

I. はじめに

本研究は、3～5歳児クラスの保育実践として取り組んだ探索活動や探究的な活動の事例を通して、その中で見られる幼児期の「学び」とはどういうものなのかについて、「興味・関心」「目的意識」の過程を経て獲得していく学びとその育ちの視点から論考した。

今日、『保育所保育指針』（2008年告示）「第一章」や「学校教育法」（2008年改正）の「第二十三条」において、「保育の目標」として「生命、自然及び社会の事象についての興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを養うこと」ということが示され、領域「環境」は、「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」観点から子どもの育ちを考えていく領域として示されている。このように、「好奇心」「探究心」をもって関わることによって「思考力の芽生え」を培うことは今日の幼児教育における重要な課題の一つである。子ども達は、日常のふとした出来事を見たり・聞いたり、触れたり、様々な感覚・感性や身体を使って感じたりしながら「すごい！不思議だな！」「なぜ？どうして？」「こうやったら、いいのではないか（うまくいくのではないか）？」「こうやってみよう。」と疑問が芽生えたり、次の方向性・めあてを見出したりする。その疑問を解決していく過程や、次の方向性・めあてを見出していく過程の中で、これまでの経験や知識を踏まえて考えるという「興味・関心」が芽生え発揮される。本研究で取り上げる「学び」はその探索活動や探究的な活動の過程を経て得られるもの（興味・関心の過程を経て獲得していく経験・知識・概念・発想など）を指す。そこで、保育実

践の中で見られる探索活動や探究的な活動を分析・考察することを通して、活動の中で見られる「学び」を保育者としてどのように理解し、「興味・関心」や「目的意識」に着目して学びを広げたり深めたりしていくような保育実践をどのように行っていけば良いかという視点を提示することが本研究の目的である。

II. 研究方法

1. 調査対象園と事例の抽出

筆者が2011年度～2012年度に伊丹市立O保育所で実施した、園内研修での事例を基に分析を行う。この園内研修では、午前9時～12時までの日常の保育を観察し、その日の午後1時～3時まで保育所の保育者（主としてクラス担任、統合児担任、幼児組のリーダー保育者、副所長）と筆者（所長）の指定公立幼稚園での研究会に参加しての事例や各クラスのそれまでの保育実践事例を出し合いながら保育カンファレンスを実施してきた。

園内研修では「子どもの探索心・探究心を育てる」—生き生きと触れて・感じて×試して・考えて遊ぶ子ども—といったことをテーマで取り上げてクラスの保育実践事例を基に、筆者がその日に観察した保育や子ども達の様子を踏まえながら、その事例を掘り下げ、意味づけを行った。そこで、検討されてきた事例は、15事例（3歳児クラス2事例、4歳児クラス6事例、5歳児クラス7事例）であったが、本研究では、「興味・関心」や「目的意識」に着目して下記の表1の3事例を取り上げて分析を行った。

表1 3事例のテーマ一覧

3歳児 <2011年>	4歳児 <2012年>	5歳児 <2012年>
①キラキラしている～フェンスの雨粒を見て… (6月)	②磁石って不思議! (1月)	③OHPを使ってお話作りうつるかな (1～2月)

2. 事例の考察の観点

事例を考察するに当たっては、(瀧川, 2013)P.99の紀要を引用し、次の3点の観察の視点を参考にした。

- ・「探索活動から探求的な活動への道すじ」
- ・「探索活動も探求的な活動も、その過程において幼児なりの問題解決の過程を含んでいる」
- ・「探索・探求的な活動における関係性・協同性の育ちも捉える」

III. 事例と考察

各事例において、数か所①②・・・を下線しているが、これは考察する際の該当箇所を分かりやすく示すためのものである。

1. 〈事例1〉3歳児クラス

「キラキラしている～・・・」O保育所(2012年6月)(7月の雨上がりの日、園庭の遊具やフェンスなどに、雨粒がきれいに並んでぶら下がっていた。)

園庭に出てきて、「みて!しゃぼんだまいっぱい!」と言って、フェンスを指さす。保育者が「ねえ!どこ?」と尋ねると、驚いて目をキョロキョロさせながら探している。フェンスに近づいて行って「ここ!」「みて!しゃぼんだまいっぱいやろ!」と、雨粒を指さした。綺麗に並んで、キラキラとした雨粒を見て、「しゃぼんだま」をイメージした。保育者は「ほんと、しゃぼんだまができたね!」と言って発見に共感した。①フェンスにそっと唇を近づけ雨粒を吹くと、「あれ?なくなった!」と驚いていた。他児がやって来て、まねをして雨粒を吹くと、「あっ!ほんまや!」「なくなった」「しゃぼんだまがきえた!」「なんでやる?」などと言いながら次々と試めす。口で吹くと、雨粒がなくなることが面白く、不思議でたまらないようであった。保育者も一緒に遊び、子ども達と思いを共有した。

別の子は、雨粒に顔を近づけじっと見ていた。保育者は気づきを見逃さないようにしようと思いついて見守っていた。子どもは雨粒に自分の顔が映っていることに気づき、顔をゆっくりと左右に動かして②「あっ!Yちゃんの顔がユラユラしてる!こっち(雨粒に映っているもの)もユラユラしてる!」と、驚いていた。保育者は「えっ!どこ?」と、雨粒をのぞき込み、動きのまねをする。「ほら!先生も映ったでしょう!」と自分の発見に得意そうであった。保育者は、「ほんと!ほんと!」と言って、雨粒をのぞき込むと、周りにいた、子ども達

も「うわぁ!ほんと!映った!」と自分の姿や周りの景色が映っていることに気づき驚きや喜びに共感した。(しかしながら、子どもの感性を十分揺さぶり光ったり物を映したりする水滴は、子どもの探索活動をではあったが、しゃぼんだまとの違いには気づいていない様子であった。保育者は興味に共感し応答的に受け止めた。

事例1では、6月の雨上がりに見られた水滴では、雨粒には、「しゃぼんだま」とその形に気づき、吹いて雨粒が変化したことを①「なくなった」と表現している。3歳児にとってのこの「気づき」は大きく、何度も試している。「意図的に試して見る」といった探索活動が見られた。次に水滴に顔が映ることに「気づき」、自分の体を揺らす②「あっ!Yちゃんの顔がユラユラする!こっちもユラユラしてる!」と映りの気づき「学びの芽生え」であると考えられた。また、いろいろな遊びの中で、気づき、学びの芽生えが生まれ、自分のやっていることに共感してほしくて、保育者に自分が「楽しい」「おもしろい」などと「興味・関心」を持ったことを、伝えるような言葉や行動が見られるといった特徴が見られた。

2. 〈事例2〉4歳児クラス

「磁石って不思議!」O保育所(2012年、1月)(砂場や園庭で砂鉄集めや遊具に磁石を当て、ひつつくものとひつつかないものを試して遊び、草花はひつつかないと言うことを知っていた。)

準備した素材(王冠、ボタン、かまぼこ板、はさみ、こま、椅子、クリップ、牛乳パック等)多数用意する。

<磁石置き場>

U型のフェライト磁石(小)、U型磁石(大)、フェライト磁石丸(大・小)、リング型フェライト磁石(大・小)、フェライト磁石棒(小)、棒磁石(大)を種類別に籠に入れて置き、子どもが磁石の重さや形、引いたり、反発したりする力に気づくように置いていた。磁石をつなぎ、①「あれ!くつつかない」うまくつなげない時は向きを変えるとつながることに気づいた。②「先生、あのな、わかった!こっち向けたらくつつくけど、こっちを向けたらくつつかない!なんでやる!」と試して見せた。「SとNはくつつく」、「SとSはくつつかない」「へーすごい発見!」と感心すると、また棒磁石、U型フェライト磁石を使ってくつつく方と反発する方があることを確かめて遊んだ。(反発力)

<磁石にどのくらい引きつける力があるか>

素材に興味を持ち、③「くつついた」「これは、くつつかない」と言いながら、次々に磁石が引きつけるものとそうでないものに分けていた。④「ピカピカひかって、かるいものはくつつく」それなら保育者「ボタンとアルミ製のビールの空き缶はくつつくかな」と意図的に子ども達に試してもらった。何回も挑戦するがどうしてもくつつかない。⑤「どうしてくつつかないのかな?・・・」答えがでなくて困っている子どもがいたので、保育者が同じように見えても「成分」のちがいでくつ

つかないものがあることを伝えた。
 <磁石にどのくらい近づけたらゼムクリップは引きつけられるか>

リング型フェライト磁石を5個つないだものにゼムクリップを近づけていくと、クリップは、まるで跳ぶように磁石に引きつけられた。⑥「かってにくつついで行く！ゴミ収集車みたい！次はこれや！おうかん！」で試す。跳びはねてくつついたので大喜びする。強力な大型のU型磁石なら、もっと離れた所からでも強力に引きつけるかも知れないと考えたが、フェライト磁石の力と引きつける力は変わらなかった。

<大きな磁石は椅子を持ち上げることができるか>

子どもに⑦「この大きな磁石は椅子を持ち上げるかな？あかんと思う？」試してみ

てみると言って磁石を椅子の背に付け上げると、磁石は椅子を持ち上げた。



<磁石で遊ぶものを作る>

次の日、保育者は遊ぶものが作れるように、図鑑や写真を出しておいた。画用紙で人形を作り、ゼムクリップを付け動かそうとするが⑧「うさぎがたつてくれない！」と戸惑い不安な様子を見せていた。保育者が作った、立っている人形をじっと見て、小さいフェライト磁石を持って来てゼムクリップの下に置くと人形がしっかり立った。箱の下から別の磁石を当てて人形を動かし⑨「ほら、みてみて！うごくやろ！」と見せて回る。始めは見本を真似て作っていたが、素材も色画用紙だけでなく、発砲スチロールやトレーに絵を画くなど、色や形・素材など考えたり、工夫したり、試したり熱中して遊ぶ。作り方のわからない子どもには「ぼくが、教えてあげる」と友達に教える姿も見られた。

(写真1 もちあがったよ！)

事例2の4歳児は自分の発見や気づきや疑問を友達と共有するために「みてみて」よりもさらに深い「見つけたよ！」「こうやってみようよ！」という言葉のやりとりが見られた。この事例での疑問は①④は不思議に気づき、②⑤⑧「なぜだろうか？」という理由や原因を問う。③⑥⑦「これで試してみたらどうかな？」という提案をした⑨「そうだったんだ！」と4歳児なりに納得して遊ぶ。また①③⑤⑧は「引きつけられない」ことに対する疑問で、②④は「引きつけるものや引きつけられないもの」に対する疑問である。⑥⑦⑨「試して遊び」疑問に興味づけしようとしている。そして、それらの疑問を解決するために、子ども達なりに理由を考えたり、目的意識を持ったりしてしっかりと試している。引きつけられるもの疑問①～⑤の中で、その解決のきっかけとして、保育者は「反発したりする力に気づくように置いておく」意図的に用意することで、「磁石の性質の概念」に気付かせようとした行為は、磁石の性質の「学び」を引き起

こすきっかけとして機能している。また⑧の疑問・気づきが生じるきっかけとして、「見本に、立っている人形を置いておく」ということを意図的にしている。頭の中のイメージではなく、具体的（実物）を見ることで、子ども達は磁石の違いに気づくことができ、だからこそ⑤「どうしてくつつかないのかな？」⑦「この大きな磁石は椅子を持ち上げるかな？あかんと思う？」という疑問が生じている。この比べるための見本も磁石の性質の概念「学び」を引き起こすきっかけとして機能していると考えられる。

この事例のように、子ども達は、磁石の性質という言葉は知らなくても、引きつけるものや引きつけられないものがあることに気づき、学びが芽生えている段階として捉えられる。そこで保育者がそのような現象を「反発する性質」という新たな概念を伝えることによって、「学び」が意識化され、「あっそうか。このように反発しながら動くことを磁石の性質というのか」また、磁石はアルミ性のもは引きつけられないということに気づき、学びが芽生えている段階として捉えられる。さらに、そのような現象を「成分」という新たな概念を伝えることによって「学び」が意識化され、「あっ！そうだったのか。このちがいは成分のちがいだったんだ！」という概念を獲得し、体験を通して芽生えた学びがより深化した学びへと変容している。このように考えると、これらの疑問に対して子ども達の間で問題意識や気づきが共有されている中、保育者の「ボタンとアルミ製のビールの空き缶はくつつくかな」という意図的な働きかけや「図鑑や写真を見る」という取り組みは、学びの芽生えから、学びを意識化していくための「足場づくり」として機能している。

そして、そのことによって、子どもは、磁石には引きつけるものとそうでないものがある。「ピカピカひかるものはくつつく」と言い、アルミ缶はピカピカ光っていて磁石にくつつきそうだけどそうではない。「磁石の性質」概念を知ることにより、自分達で色々な磁石を使って試して遊んで見ると言う目的意識と探索活動が始まり、そこでも「この磁石をつかうと〇〇が持ちあがる」という新たな学びが生まれている。



(写真2 みて！くつつくよ！)



(写真3 磁石って不思議！おもしろい)

3. <事例1> 5歳児クラス

「OHPを使って“お話づくり”をする」O保育所
(2012年, 1月~2月)

(2月の生活発表会に向けて, クラスでは劇遊びに取り組み始めている。絵本や物語の登場人物になってイメージしたことを, 数人の友達と言葉のやりとりをしながら, “劇ごっこ”をして遊んでいる。もっと自分の考えを言ったり, 友達の意見を聞いたりしてイメージを膨らませて“お話づくり”を考えて進めている。光と影での遊びを通して“お話づくり”を考えたとき, ステージ面が広く操作しやすい, シートを分割したり重ねたりできる等の特性を持つOHPを使って遊ぶことにした。)

①保育者はOHPを使って影絵あそび的な活動が出来ないかと考え, 保育室の一角にOHPを置くことにした。“光を出す器機”として子ども達は集まった。最初は器機が珍しく, スイッチを入れたり, ピントを調節しようとネジを触ったり, 手をかざしたりといじくりまわす子ども達が多かったが, 一人の子どもが光の先に油性ペンで描いた“お話の絵”を持って立つと, その絵は上着に映り「ほら!みて!うつってる」と見せる。それを見て光の先には“お話の絵”を手にした子どもが行列をつくり始めた。まだこの時点では, “お話の絵”をOHPの天板に載せて映すということに気付いておらず, 自分の服“お話の絵”を映して遊ぶことを楽しんでた。

②次の日, 子どもがOHPの天板の上に手をかざしていると, 影絵のように, 手の形を変えて壁に同じように動く手の影が出来ることに気づいた。それを見ていた子ども達が“お話の絵”を持って来て, 天板の上に載せた。すると思いは的中したようで壁に“お話の絵”が映しだされた。「これは?」「つぎはこれ!」と次々 絵を乗せ替えていく。逆さに映ったり, 上部のレンズを動かすと絵が動いたり子ども達はまたOHPを触ったり, 絵をのせ替えたりしていた。③上部レンズを動かして光の先を移動させ絵を動かす子ども。天板の上で“お話の絵”を動かして「お話しが始まります」と次々絵を動かしてのせ替えてお話しを作る子ども。青い帽子的色と「黄色い帽子で緑になる」と色の重なりで色の変化に気づく子ども。“お話の絵”ではなくおもちゃを持ってきて影絵遊びをする子どもも出てきた。このような多様な遊びに広がり友だちと一緒にお話づくりをしたり, プラスチック版に描いた物語をOHPシアターで発表

したりして, 色の重なりを「こうやって見たらどうなるかな?」と一緒に試し, アイディアを出し合っていて楽しんでいる。他に, おもちゃやガムテープの芯, ブロックやホッチキス等, 色々な物で, 「これはどう映るかなあ?」「まるしかできないよ!」と予想のやり取りをしながら, 光を作り出す道具としてのOHPに子ども達が集まって遊んでいた。



(写真4 自分の手を写して遊ぶ)

事例3は「OHP, “お話の絵”や物体・手, その影」といった「光—物体—影」の関係に気付いて遊ぶ年長児の様子が見受けられた。“お話の絵”, 絵を画いてみたり映してみたりと繰り返しながら遊んで行く個人的な探索活動が, 互いに重なり合い影響しあっていた。プラスチック版に絵を描くと, それが影として映るという光と影の関係の学びが生まれていた。①ではOHPの使用において, 光を直接的に操作して方向を変えたり, “お話の絵”では描いた絵がカラフルに影として映り, 手やおもちゃ等では, その形の黒い影として映ることに気付いたりして, 色々試しての探索活動での学びが生まれている(①~②の期間に生じた学び)。更に③においては, 個人の気づきや発見が他児にも広がり, 更に「これはどう映るかな?」という疑問を一緒に解決したりして行く中で, 「こうやって見たら, こうなる」という新たな気づきによって学んだことが共有されたり, 協力しながら, 問題を解決する姿(協同的な学び)が見られた。

また, 色の重ね合わせを試している子ども達の姿や, 色々な物を持ってきて影の形を予測しながら確かめている子ども達の姿は, 探索的にいろいろ試すというよりも, テーマを自分達で追及して行く探究的な活動として捉えることができ, その過程の中で学びの広がりや深まりが見られる。そのため, この事例は, 遊びの中で試す・繰り返すといったことが展開されて行くことにより, 子ども達の遊びや学びが充実して行き, 探索する姿から探究する姿への変化の中で「目的意識」を持った「興味・関心」が生まれる事例と考えられる。



(写真5 おにたいじの絵にしよう)

IV. まとめ

―この研究を通して次のことが明らかになった。―

(1) 事例から得られた内容と質の変化についてであることが明確になった。

本研究の3つの事例では、何度も何度も繰り返しながら試したり確かめたりする探索活動や「どうすればうまくいくか」「こうやってみたらどうなるか」を追及した興味・関心(探究的な活動)の中で、問題解決の過程が見られた。秋田(2000)が「知のいとよみの展開過程」において「五感を通しての出会い⇔知的な好奇心・関心の喚起⇔関わる⇒見出す・気づく・考える⇔臨む・表す⇔確かめる・振り返る」という「この過程は直接的な道筋ではなく、行きつ戻りつしながら、何度も繰り返したり、何日もかかりながら進む往復過程であること」と指摘しているように、3つの事例とも、問題解決の過程の中で、行きつ戻りつしながら、何度も繰り返したりしている様子が読み取れる。その中で学びが少しずつ洗礼されていくのではないかと考えられる。

3歳児クラスから5歳児クラスへの気づきや学びの育ちの道筋として考えると、素朴な「興味・関心」(雨粒をしゃぼんだまいっぱいイメージして吹いたり、顔を映したり、磁石には反発する性質)から、新たな概念の獲得やこれまでの遊びの経験を生かして解決していく中での「興味・関心」は当たり前発達ではあるが、学びの質が変化して深まっていることがわかる。これらの3つの事例は、学びが顕著に現われているものを取り上げている可能性もあることは否めない。

探索活動から探究的な活動への育ちの中で「興味・関心」や「疑問・問題」、「目的意識」の内容や質が変化してきていることを踏まえると、そこでの学びの内容と質が変化して深まっていくということは十分ありうることだと考えられる。



(写真6 スイミーのお話)

(2) 探索活動から探究的な活動への育ちと学びの深化を通して

探索活動の経験が何度も積み重ねられることが土台として探究的な活動が育っていき、問題解決の過程の深まりが見られるようになるが、その育ちの中で学びの質が変化して深まっていることを再認識していくことが重要である。探索活動の中で見られる問題解決の過程は、「これはどうか?」「あれはどうか?」といった広がりを持って、探索的に多様な対象を試して思考錯誤していく過程であり、探究的な活動で見られる問題解決の過程は、明確な目的意識を持って「こうやってみたい」「こうやるといいよ」けれど、どうすればそれが解決するのか追究していく過程である。そのため、探索活動から探究的活

動への活動の質の変化は、広がりを持った学びから、深まりを持った学びへと学びの質の変化かが考えられる。

2010年11月に文部科学省から出された「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告・注1)」は、幼児期における「学びの芽生え」を、いかに児童期における「自覚的な学び」へと繋いでいくかが重要な課題とされているが、そのためには、幼児期の探索活動や探究的な活動を一過性のものでなく、保育内容として積極的に取り上げ、学びのきっかけや深化のためには保育者の関わりを意識することによって、学びの意識化・自覚化を子ども達に引き起こし、深化しい行く一助になると考えられる。

以上のように、本研究のテーマである幼児期の探索・探究心を育む体験は、日々の保育において何度も積み重ねられ、子どものなりの問題解決の過程を通して、問いの追究過程の自覚化がされる中で、「目的意識」や気づき(発見)の共有化が図られる。「興味・関心」を持って自覚的に学ぶことが徐々に意識化される過程が事例を通して示されたと考える。

V. 課題

本研究においては、3歳児から5歳児の幼児期の子ども達の発達を踏まえて、保育実践における探索活動・探究的な活動における「学び」について検討した結果、その大きな流れを示すことができた。

今後の課題としては、例えば、3歳児、4歳児、5歳児の探索活動や探究的な活動での学びをより深く微細に分析し、理論を精緻化していくことや、保育者の援助や役割からの分析、環境構成や教材研究からの分析などまだ多数課題が残った。今後は本研究を土台にして研究を積み重ねて行きたい。

注1: 幼児期における「学びの芽生え」から「自覚的に学ぶ意識」へと繋がっていく過程において、「人とのかかわり」や「ものとのかかわり」という直接的・具体的な対象とのかかわりで幼児期と児童期の教育活動の繋がりを見通して円滑な移行を図ることが必要」と示されている。

【参考・引用文献】

- 瀧川光治「著」『保育場面の幼児の探索・探究的な活動における「学び」の分析』第14号: 関西国際大学研究, p108—110 (2013)
- 森川 紅「著」『保育の楽しみ方がわかる本』ひかりのくに, p92—94 (2012)
- 瀧川光治「幼児期における探索・探究的な活動と子ども理解」～活動の広がりや深まりを見通すために～日本乳幼児教育学会第202回大会発表

論文集, p68-69 (2010)

秋田喜代美「著」『知をそだてる保育—遊びでそだつ
子どものかしこさ』ひかりのくに, p94
(2000)

無藤隆編「著」『幼児期にふさわしい知的発達—幼児の
好奇心・探究心を育てる保育』チャイルド本
社, p10-11 (2000)

山内昭道「著」『幼児からの環境教育—豊かな感性と
知性を育てる自然教育』明治図書, p46-47
(1994)

今井和子「著」(1990)『自我の育ちと探索活動』ひと
なる書房, p3, p14-33 (1990)